

黒き鎧は手を伸ばす

朝凧

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日大好きな親友同士がゲームのせいで険悪になっているのを目撃。

前みたいに3人仲良く遊ぶのを目指して、何も出来ないボクは皆の力を借りて頑張る

3  
話

2  
話

1  
話

|

|

|

目  
次

14

10

1

# 1話

夢を、見ていたんです。

夢の中のボクは、目の前の欲しい物に手をのばし、例え届かなくてもそれでもと、手を伸ばし続ける人でした。

その人の苦しみはとても強く、その人の思いもとても強かった。

ボクは叫びました。

頑張れ！頑張れ！頑張れ！！

そう強く願い続けていたんです。

『ピピッ、ピピッ、ピピッ…』

「ふあ〜…変な夢…です…」

目覚ましの音で目が覚めたボクは、布団の中で欠伸と共に眩く。

目覚まし時計はニューロリンカーのアプリなので音は響かず同室の”ニコちゃん”を起こさないで良かったです。

すーぴーと起きた様子がないのを見て、そう思いながらまだ鳴り続けているアプリを止めながらベットから抜け出し、着替えを始めます。

ボクの名前は神雅 朝風。全寮制の小学校に通う3年生。好きなのは料理と格闘系全般、苦手なのは体育と英語な、極々普通の女子です。

もちろん体育が苦手なボクは格闘技が好きと言ってもTVで見たり、ニューロリンカーで調べて物真似したりしかできませんですが。

”ニコちゃん”は同じ学校に通う上級生で寮の同室の上月 由仁子ちゃん。5年生のニコちゃんはボクの2つ上です。

ニコちゃんは本当は”ちゃん”をつけるなって言うのですが、照れ隠しなが分かってるから呼び名はニコちゃん。

ちよつと怒りっぽかったり口が悪かったりするけど、とっても面倒見が良くて優しく、寝てたり猫被っているとまるで、天使の様なかわいい女の子です。

ボクが通っている学校は制服なので三貫日も終わり、3学期が始

まったばかりの今は長袖ブラウスに黄色い厚手のチェックのスカート、紺のブレザーに学年別カラーのリボン。

ボクの学年は紺…というより黒になり、同学年の女子には評判が良くないです。

本当はスカートではなくズボンを履きたいですけど、学校の指定なので仕方なく、代わりにボクはニコちゃん提案の黒タイツを履いている。

クローゼットに備え付いている鏡を見ながら髪の毛の寝癖を梳かし、ストリートを左右で黒のヘアゴムで適当に束ねておさげにすれば身支度は終わりです。

この髪型もニコちゃんが「これなら楽だし女子らしくなる」というる気に掛けて考えてくれたです。

昨日の夜も遅くまでこっそりフルダイブ系のゲームをやっていた様子だったので、まだニコちゃんを起こさない様に静かに部屋を出ます。

洗面所にて朝の身だしなみを終えて、食堂に近付くと庭の畑を寮長先生が手入れをしている様子が見えた。

「おはようなのです。寮長先生」

「あら、早いよね。朝風さん」

そう言つて立ち上がつてこつちに微笑んでくれたあの人がボクや、ニコちゃんが通っている全寮制の学校練馬区・遺棄児童総合保護育成学校の寮長先生。本当は寮長だけど先生じゃないらしいけど、皆から寮長先生と呼ばれるとっても優しい先生です。

「朝ご飯作るのお手伝いしますよ！」

「毎朝ありがとう、お願いしますね」

そう話してから厨房で、寮長先生が来るまでにボク用に買って貰つたエプロンを付けて、調理の準備を始めます。

女子寮だけです。全員分ですから手早く、そして美味しく作つてしまおうですよ！

「朝風さん。そろそろあなたも食べて」

部活の朝練や日直当番などの早め登校組が朝食を食べ終わり、空いた席で通常登校組が大方食べ始めた所で寮長先生から声がかかりました。

後から合流した朝の朝食当番のメンバーも皆自分の分を受け取っている所でしたので、ボクも貰おうと思い、ふと気付きました。

ニコちゃんがまだ起きて来てない。

寮長先生にニコちゃんを起こしに行くことを告げてから部屋に戻ると、案の定未だに気持ちよさそうに寝ていました。

あまりに気持ちよさそうなので起こすのも忍びないです。けれどあんまり遅くなると朝食を食べる時間が無くなってしまいます。

よし！起こすぞつ！と気合いを入れてからカーテンと窓を開け、布団を両手で持って勢い良くひっぺがし、大きく息を吸って。

「ニコちゃん起きろー！」

「なんだ!?!何処のレギオンの襲撃だ!…あ?！」

と、ニコちゃんを起こす事に成功したです。

「ダメですよー?あんまり夜更かししちゃあ」

ニコちゃんは着替えながら、ボクのニコちゃんの布団を折り畳みながらするお説教を憚然とした様子で聞いていた。

ゲームが楽しいのは分かるですが、朝起きられないのではダメですからね。おこずかいの範囲内であって勉強や日常生活に影響が無ければ、ボクも子供身ですからあんまりいろいろ言いたくは無いです。

「朝食抜くと大っきくなれないですよ?」

「ぐっ…ぬぬぬっ…」

でも、ニコちゃんがそこまでのめり込むゲームなんて珍しいですね。

近頃、旧世代のちよつと過激なゲームが好きなのは知ってましたが、フルダイブ系では対戦型のFPSなんかでも倫理がどうのこうの

で、人の形ではなくぬいぐるみが水鉄砲を撃つたりしているので、好きではなかった様子でしたが。

そして何よりニコちゃんは人見知りが強いですからね。

「誰かと一緒にゲームしてるですか？」

「ん？ああ、深山に誘われて始めたんだが、結構楽しくつてな。」

キー君が誘ったですか。キー君は本名は深山 騎兵と言つてニコちゃんの更に2つ上、今中学1年で同じ寮の先輩です。背が低い事を悩んだり、あんまり男らしい顔で無いことを悩んでいたりと、頼りない所もあるですがとつても優しいお兄さんです。

呼び名はキー君。頼りがいがもう少し付いたらキー兄にするかもしれないです。

前は良くニコちゃんと一緒に良く遊んだのですが、中学に上がつてからはあんまり会つてないですからね。元気にやつてるかな？

「ニコちゃん、今度ボクもそのゲーム誘つて欲しいです。キー君とまた遊びたいです。」

「あー…まあ、気が向いたらな…」

む。あんまり誘う気ないですね？まあ、仕方ないですね。そろそろご飯食べないと学校に遅刻しちゃうですから。行くですよ、ニコちゃん。

朝はなんとか学校に遅刻することもなく、その日学校ではいつもどおりいつもの1日でした。

ニコちゃんとは校門で別れて、友達と挨拶をしながら上靴に履き替え、教室に向かいました。ニコちゃんとは学年も離れてるので下駄箱も遠いです。

いつもどおり友達とお話をしながら先生を待つて、いつもどおり退屈な授業を受け、いつもどおり体育を見学し、いつもどおり美味しい給食を食べて、いつもどおり眠い午後の授業を乗り越えての下校です。

うちの学校はお掃除には業者さんが入るのでそれだけは助かるで

す。決してお掃除が嫌いな訳ではないですが、放課後は用事がある生徒も多いので、寮の門限までに帰ろうとするとギリギリで慌ただしくなるのですから。

「どうして手をだしたんだ！」

学校から帰ると庭の方からニコちゃんの声が聞こえて来ます。なんだかちよつと穏やかでない感じの声です。

うちの寮はその性質上、トイレやお風呂場の様な所以外の公共スペースなどはソーシャルカメラ、昔で言う所の防犯カメラの様なものがあるのですが、庭の畑には意外と死角になってしまう所が多くあるので何かあつたら大変です。

そう思つて覗いてみると、キー君とニコちゃんがいました。一応暴力であつたり、恐喝の類いではないので話を聞いていると、どうやらニコちゃんが怒つていて、キー君が聞き流している様です。

朝に話した例のゲームの事でしょうか？不可侵条約とか災禍の鎧を手放せとかレギオン存続とか断罪とか聞こえます。

どうやらキー君がゲーム内の他のチーム、レギオンに、災禍の鎧と言う伝説級呪いのアイテムをどっからか持つてきて、殴り込みをかけた。

しかし、レギオン同士は不可侵条約を結んでいるのでこのままでは他レギオン全体に潰される事になる。

そうなる前にキー君をレギオンマスターとして断罪と言う一撃必殺で排除するか、王として災禍の鎧を他の王達に犯人として差し出さなくてはならない。

と、言う事らしい。

わお、キー君大胆。でも、キー君がそんなニコちゃんの敵になるような事を積極的にやるとは思えないんだけど…

んー…プライド…かな？ニコちゃんはキー君に誘われてゲーム始めたって言ってたけど、ニコちゃんの方が王っていう位強かったり、レギオンマスターとして地位が上だったりとキー君のプライドぼろぼろで、誘つた方としての意地だったりで強くなりたくて、いろいろ



してたらやり過ぎちゃった、とか。

でもキー君、災禍の鎧どこから持って来たんだろ？そこまで強くないはず（だからこそ呪いのアイテムを使ったはず）のキー君がラツキーだけで、伝説のアイテム手に入られると思えない。

となると…キー君にレギオン全体に関わる問題を起こさせて達成する目的…ニコちゃんがキー君の事で黙っていられるはずがない…引っぱり出すのが目的？

「これは…侵略戦争仕掛けられてるかも知れないです…」

ニコちゃんとキー君の話はボクがいろいろ考えた後直ぐに、キー君が強引に部屋に戻った事でお開きになったです。

でも…

「おい、いつからそこで聞いてた？」

ボクがニコちゃんに見つかり、ニコちゃんがしまったと言う顔をした後、厳しい顔をしたままお部屋へ連行された後、ボクは壁を背にニコちゃんが手で逃げ場を封じられた状態で詰問されてるです。

あんまり近くでかわいいニコちゃんの顔みると顔が赤くなる気がして、ドキドキするです。

ボクは見たまま聞いたままを話すと今度はやってしまったという感じで、頭を抱えて座りこんでしまいました。何ででしょう？例のゲームの話はナイショにでもしないといけないのですかね？

でも、今は。

「ニコちゃん、例のゲームボクもやらせて欲しいです。」

さっきの二人の話、キー君の様子。いろいろ気になる事も言いたい事もあるですから、まずはやってみるのが一番です。ゲームをやったことのない人の話など、説得力も無いですし。

「あー…うん。分かった。もうそこまで知られちゃってるなら、インストールするかはともかく、事情を話して黙って貰わねーとな…」

なるほど、ナイショにする必要のある違法っぽいゲームなら強制執行で消去されないように黙って貰う必要もありますものね。ボク

達は保護されている立場ですから大人の介入は避けたいですしね。

その後夕食準備の時間になるまで部屋で例のゲーム、ブレインバーストについての説明をニコちゃんから聞いていました。

思考を一千倍に加速するだとか、ソーシャルカメラのハッキングだとか、それを利用した現実が舞台の遭遇戦だとかいろいろ聞きました  
が、一番驚いたのは”対戦格闘ゲーム”であること！

もう一度言います”対戦格闘ゲーム”です！

格ゲーですよ格ゲー！しかもフルダイブを使っているため全身を動かして戦うのです！こんな素敵な事は無いのです！

何ですかニコちゃんその呆れた様な顔は。殴って殴られての格闘ゲームですよ。

え？剣や重火器もあるし、ニコちゃんの所は遠距離主体のレギオン？

良いじゃないですか。戦えば格ゲーですよ。

中にはシューティングばりに弾幕張ってきたり、ビーム連射してきたって向き合って戦えば格ゲーですよ。

わ、笑わなくても良いじゃないですか。

あ、ほら、ボクは夕食準備の時間ですから行って来ます。

夕食食べ終わったらインストールして貰うですから！

準備しといて下さいよ！

ボクはそう言って未だに大爆笑しているニコちゃんから逃げるように夕食の準備に向かったのです。いえ、逃げてません。寮長先生を待たせてはいけないので、急いで向かっただけです。

「(一)馳走さまです。寮長先生」

食器を返却場所に返して、お皿を洗っている寮長先生に声をかける。ニコちゃんは早いうちに食べ終わり部屋に戻っていて、食堂では数人が夕食を食べたりしているだけで、皆談話室の方でテレビを見たり遊んだりしてる。

「おや、ずいぶん急いで食べたんだね」

「ニコちゃんがお部屋で待ってるんです」

寮長先生に軽く挨拶をして、部屋に戻るとニコちゃんはベットの横になってフルダイブしている様だった。

むむむつ。直ぐにインストールしようと思ってたのに。そう思いながら夕食前に出来なかった宿題を片付けるために机に向かう。

学校で勉強してるし、もつとやりたい人は塾だったりフルダイブ系の通信だったりいろいろあるんだから宿題なんか出さなくて良いのに…そう思いながらも、出された物は仕方ないです、ニコちゃんが戻って来るまでに出来る所までやっておきましょう。

そうして机に向かってしばらく、もうすぐ宿題も終わるかという所でニコちゃんがフルダイブを終わらせて来た。

「アサ」

もうちよつと待ってて下さい。もう少しで宿題終わるですから。

「いや、そのままでもいい。今はインストールしないことにしたからな」  
「ふあ!？」

どういうことなのですか!?インストールしないって!キー君助けるの、ゲームの外からじゃ間に合わなくなっちゃうのよ!

「インストールしないしないし訳じやない。今は時期が悪いって話だ。アサにはいろいろ知られちゃったし教えちゃったが、今から始めた所で間に合いはしないからな」

そんな事無いのです!やってみれば意外となんとかなるはずっ…

「それに!…それよりもアサには純粹に対戦を楽しんで欲しいんだ。そのためにも、インストールするのは全部片が付いたら後の方がいい」

そんな!それじゃあキー君は?!

「あたしがレギマスとしてきっちり片付ける」

話は終わりだ。風呂行ってくる。そう言ってニコちゃんは部屋を出ていってしまったです。

「…それじゃあキー君とニコちゃんは」

このゲーム楽しめなくなっちゃうですよ…

## 2話

夢を、見ていました。

夢の中のボクは、激しい痛みにも必死に耐え続けていました。

絶え間なく襲いかかる苦痛。

逃げたい、逃げ出したい。

ボクはすぐにそう思いました。

しかし、その人の思いは違っていたです。

その人は、少しも諦めてなんかいい。

仲間を守る頑丈な体が欲しい。

仲間の危機にいち早く駆けつけられる早さが欲しい。

でも、その心の中で、見ている事しか出来ない自分に強い怒りをほとばしらせていました。

その片隅に、仲間を力を借りなければなんにも出来ない、悔しさと悲しみがあつたのです。

いつもどおりに目覚めた後上半身だけ起こした格好で、寝ているニコちゃんを見るとはなしに眺めつつ、昨日の事を考えます。

結局あの後話は終わりだとばかりに、お風呂出てからそのままお布団に潜り込もうとするニコちゃん。

なんとか押し留め話をしようとお布団にくるまる上から跨がり叩いてみたけれど寝息が聞こえて来て断念したです。

消灯時間ギリギリのため諦めて寝るための準備をしたです。

いつも通りの支度を済ませて食堂広間に向かうと畑から寮長先生が戻って来るのがみえた。

「寮長先生おはようです。」

畑で収穫したキャベツを持って部屋に上がって来た寮長先生に挨拶をしながら、キャベツを一つ受け取る。

収穫されたキャベツは3つあるけど、同学年と比べても小さいボクはそれでもう手がいっぱいになってしまう。

「おはようございます、朝風さん。今日はこれがいい感じでしたから使ってしましましょう。」

渡されたキャベツを流し台に置いてエプロンを着ける。

半分程度は千切りにするとこの事で寮長先生に持ちやすい程度に包丁で切り分けて貰い、ボクは

スライサーやザル、ボールを用意する。

踏み台を準備して寮にいる皆の分の千切りを作る為にひたすらスライサーでカットしながら、どうやってニコちゃんにインストールして貰うか考える。

ニコちゃんはゲーム内がゴタゴタしてしまっていて楽しめない上に、事が始まってしまっている今ではボクが十分に戦力になるまでキー君の事を放置、時間伸ばしする訳にいかない。

であれば、全てが終わり落ち着いた頃にゲームを始めた方が良いと判断した訳だ。

でも、ボクはゲームを楽しみな気持ちもあるけれど、一番の気持ちは助きたい。キー君も助きたいし、ニコちゃんも。その為には一度話を聞きに行く必要が…

『警告、警告』

「あっ…」

そんな事を考えながらスライサーを使っていた為か指先を切ってしまいました。警告が視界に表示されたため大事にはなりませんでしたが、

「あらあら。朝風さん大丈夫？」

寮長先生に心配させてしまいました。

「大丈夫です…けど、一応病院で診て貰わないとです…」

「そうね。放課後にでも行ってらっしゃい。今はこれで」

そうやって寮長先生は水が染みない様に防水の絆創膏を貼ってくれました。

ボクも多少の擦り傷なら問題ないですが、スライサーの傷口は削ぐ

感じですから一応病院で診て貰った方が安心です。

「でも珍しいわね。朝風さんが上の空なんて。なにか心配事でもあるの?」

寮長先生がボクに目線を合わせて問いかけてくれるです。

でも、ニコちゃんが隠したがっているゲームの事をボクが話す事はできないです。

でも、ゲームであることは話しても大丈夫ですよ?

「実はニコちゃんとキー君がゲームでケンカしてしまって…」

ボクはそのゲームが現実の世界を舞台にARを使ってアイテムやポイントを集め、交換やバトルを楽しむゲームだと説明したです。

そしてニコちゃんのチームで二人は一緒に遊んでいたけれど、キー君が最近焦ったように無茶ばかりしてニコちゃんが怒ってしまったと話しました。

「もしかして、そのゲーム、GPSを使ったものかしら?」

寮長先生が少し考えながら聞いて来たので「ボクはやって無いので分からないですが」と前置きした上で「街中を歩き回る必要もあるそうなので使ってるかもです」と答えた。

「寮長先生キー君の事何か知りませんか?」

本当はキー君本人に聞きに行くのが一番なんですけど、何か知っていない寮長先生に聞いてみる。昨日のかたくなな様子ではボクがいつても話してくれるか分からないですし。

寮長先生はなんだかとっても話し辛そうにしたあとジッと見詰めているボクに「皆にはまだ内緒よ」と言って話しました。

曰く、まだ本決まりではないが里親が決まった。

曰く、相手方はキー君の遠縁の親戚である。

曰く、相手方の家は福岡である。

曰く、曰く、曰く…

「きつと由仁子さんと一緒に遊ばなくと思って焦ってしまったのね」と、そこまで話した所で他の朝食当番が来たためお話はおしまいとなってしまうです。

寮長先生は皆の方に挨拶をして向かう前にこっちに向き「まだナイ

「シヨよ？」と念をおしてから調理へと戻って行った。

ボクは怪我した為調理はお休みし、キッチンから出てホールのソファーに向かいながら、教わった事について考える。

「キー君に家族ができるのは良いことです」

もちろん別れる事は辛いけどキー君の為に仕方ない事です。

でも、笑顔で見送れないような状態はダメです。

それと

「ゲームは続けて貰うですから！」



### 3話

調理係がお休みになってしまったので、さっきの話もあり、男子寮への階段に向かう。

男女は基本的にお互いの寮への入り口の階段より先に入るのを禁止されている。

けど、まだ3年生のボクは消灯時間までならば入る事ができる。4年生になってしまうと禁止されてしまうのでギリギリでした。

「ボクもまだ若いです。いけるです。」

まだ食堂のある1階には降りて来て無かったので部屋に居るのだとは思うけど、もう6時も回っているので朝食を食べないで出掛けてしまった事も考えられます。

「キー君おはよー…」

キー君には同室の人はいないのでノックをした後こっそりと部屋に入る。

ノックをした時に返事が無かったからもしかしてと思ったけど、部屋はカーテンが閉まって暗くなっていて、キー君のベッドは潜って寝ている様で、布団が膨らんでいました。

規則的に布団が上下している様子から未だ良く寝ている事が判る。物音を発てないよう静かにカーテンを開けた後、小走りでベッドに近いて…

「オハヨウ！キー君起きろー！ー！ー！」

「ぐふおっ!?!」

ランニングボディープレスで起こしてあげた。

ボクは太ってる訳じゃあないけど、身長割りにはちよつと重い。決して太ってる訳じゃあない。

だからソーシャルカメラに映っても大丈夫な、安全な技の中ではダメージが大きいので、じゃれあいで良く使ったりします。

まあ、ここは個室なのでカメラはないのですが。

「アあサあく。なんてことするんだよ」

そのままマウントポジションをとっていると、キー君が布団から顔

出してボクを見ると不服そうな顔で見えますが、気づかなかつた事にしておきます。

だって今日も学校だと言うのにこんな時間まで寝てるのが悪いのです。

でもそのお陰で捕獲出来たのでなにも言わずに笑顔で挨拶します。

「おはようです、キー君。起きたですか？」

「今何時だと思っただよ！アサ！」

「何時って、もう六時過ぎですよ？そんな事より！」

ボクは呆れた感じで答えた後、何を言い出すつもりだと頭に？を浮かべているキー君に身を乗り出しながら笑顔で言うのです。

「良く頑張ったです！流石は男の子ですね！まさか引越す前にゲムムとはいえ、オレだってこんなになんか強くなつたんだから心配すんな作戦を実行するとは！」

「ちよつとまで！アサお前どこで聞いた!？」

「わぷっ!？」

まだ沢山喋ろうとしていたボクは両手で引き寄せる形で布団に顔を埋めさせてキー君に黙らせられてしまったです。

キー君も背が低く頼りないとは言え年上の男の子ですから、力づくで引張られてしまうと負けてしまうです。

ボクはまだ9才ですからね。押さえ込むのも道場で習った技を使わなければ、すぐ逃げられちゃうです。

「どこでって何をですか？」

ボクはキー君の拘束から頭だけ抜け出して首を傾げながら聞き返すです。

キー君はあの…とかその…とか言いながら言いくそうにしてるです。

相変わらず自信ないのは仕方ないですね。

「ボクは福岡の親戚の所に行くって話を今朝寮長先生に聞いたのでここに来たのですよ？」

キー君は納得したかのような、呆れたかのような声でああ…と云って力を抜いて枕に落ちます。

多分本当はナイショでゲーム内で伝説の武器をGETからのたくさんポイントGET!を実現させてニコちゃんにサプライズ!したかったんでしょうけど。

「でも、ニコちゃんも気がついてると思うですよ? キー君ゲーム内で暴れたから。」

「!?!」

「サプライズするならもっと静かにやらなきゃだめですよ?」

「……」

「それとも理由でもあるんです? 例えば混乱状態になるとか?」

伝説のアイテムを手に入れて対戦でポイント稼ぐだけなら噂になるだろうけど、強い力があればこっそり稼ぐ事もできるです。

けど、実際にはまだニコちゃんがキー君が討伐対象になってしまっているのではないかと危機感を覚える程に、他の人からの批判的だか恐怖の対象だかになっしまってます。

だから事情が有るのなら是非とも聞いて置きたかったです。

「まあ、伝説の武器とは言っても悪い方の伝説ですからね。そういう武器は外せなかったり、暴走したり、呪われてたりなんてのはゲームでは良くある話です。」

「……止まれないんだっ……!」

喋り出したキー君はいろいろ話してくれました。